

によりしなるべし、正月はとしの始の祝事をして、しる人なるはたがひに行かよひ、いよく、玄
 たしみむつぶるわざをしけるによりて、この月をむつび月となづけ侍り、その言葉を略して、む
 月といふとぞき、及びしと問世答みえ、正月むつき、睦の意にて、むつましく親族朋友も、相したし
 めばいふ事、舊説のごとく成べしと、類集名辨せり、然るに平田篤胤曰、ムツキはも新ゆ月なり、モユ
 の約ムなり、これ草木の萌きざすをいふ、きさらぎはクミサラ月にて、それよりイヤ生といふ順
 なりといへり、この説古人未發なり、賀茂真淵が一月を牟月トツキといふは毛登都月モトツキてふ事なり、毛都
 の約は牟なれば、しかいふといへるはおぼつかなし、正月を初春と和名類いひ、又異名をさみと
 り月と躬恒秘いひ、暮新月と俊頼朝臣いひ、年初月と上いひ、初空月と藏玉いひ、霞初月と上いひ、
 初春月と上いふも、みな異名にして、後世にいできしところなり、もとの起りは、躬恒秘藏抄より
 はじまれることならんを、俊頼朝臣みづから歌をよみたまひて、月々の異名をいひ初しなり、そ
 れより中昔にいたりては、藏玉集などにのせたる異名も、おなじく歌によませ給ふが、そのま、
 異名となれるながら、またく藏玉集の月々の異名は、異名をもとめたまひて、歌によみたまふと
 おもはれぬる故は、定家卿、家隆卿なども、月々の異名の歌をよまれ、後鳥羽院御製も藏玉集に載
 られたれば、仰をかうむり奉りて、よまれしとみえたり、歌がらも、其月々の時候、又は景物など、と
 りどりに讀こまれたれば、あたらしく、月々の異名をよみいだされし事としられたり、又西土に
 て、ものにみえしは、正月上日と尙書いふ、是正月をいふ名目の物に見えし始なり、正月は月の初
 なり、又月正元日上と書る也、元日もおなじく日のはじめなれば、もつ日といへる義にて、元日
 と書る也、元年春王正月と春秋いふも、物正しきの義にとりていふなり、正月謂之端月と史いひ侍
 るも、正月といふと義おなじ、端正の二字、いづれもたゞしき義なれば、文字をかへて端月とかけ
 るなり、玉燭寶典も正月爲端月といへり、又孟春之月、日在營室禮記いひ、また正月を爲陬と爾雅い